

筑波大学 社会貢献プロジェクト

2018-19

筑波大学社会貢献プロジェクト 2018－19

社会貢献プロジェクトとは

社会貢献プロジェクトは、筑波大学と社会との多様な形での連携活動を学内公募し、総合的に支援するもので、平成 16 年度にスタートしました。平成 21 年度からは教員だけでなく学生も申請できるものとなっております。

本プロジェクトは、特定の分野に限定することなく、地域との連携活動を自由に提案することを特徴としており、「科学振興」、「環境」、「健康・医療・福祉」、「文化・地域活性化」等、内容は多岐に亘っています。昨年度も様々なプロジェクトが実施され、本学ならではの取り組みを展開していきました。

〈筑波大学社会貢献・地域連携 HP〉
<https://scpj.tsukuba.ac.jp/>

筑波大学社会貢献プロジェクト 2018-19

科学振興

■ 筑波大学発 ―おもしろふしぎ理科実験・工作隊―	4
数理物質系 准教授 小林 正 美	
■ 超小型人工衛星の開発と利用を通じた体験実習型科学教育による地域・社会貢献プロジェクト	6
システム情報系 准教授 亀 田 敏 弘	
■ 地域社会貢献のための小中高校生への理科教育啓発活動	7
数理物質系 准教授 後 藤 博 正	
■ 多様な人々に対応できる自然観察環境整備	8
生命環境系（山岳科学センター） 教授 石 田 健一郎	
■ 学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT～	10
生命環境系 助教 Matt Wood	
■ 大学院生による国内外における学術的交流の促進	11
システム情報工学研究科 博士後期課程 讃 井 知	

環 境

■ 環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業	12
生命環境系 教授 田 村 憲 司	
■ 「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2018	13
生命環境系 助教 丸 尾 文 昭	

健康・医療・福祉

■ 住民主導による健康減量教室の普及	14
体育系 准教授 中 田 由 夫	
■ 摂食障害の早期発見・早期治療、医療連携、社会復帰を目的とした総合的な疾患啓発と疾患教育	15
附属病院 病院講師 塚 田 恵 鯉子	
■ 『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2018』 ～小学生対象の医療現場体験ツアー～	16
附属病院 看護師 渡 辺 小百合	
■ 2019 茨城国体に向けたジュニアアスリートへのメディカルサポート	18
医学医療系 講師 鎌 田 浩 史	
■ アルコール健康障害対策における茨城県の対策推進プロジェクト	19
医学医療系 准教授 吉 本 尚	

文化・地域活性化

■ 哲学カフェによる地方創生	人文社会系 教授 井 川 義 次	20
■ アートと英語に親しむ「夏休みアート・デイキャンプ&アートたんけん隊 2018」の実施	芸術系 教授 太 田 圭	21
■ つくさか地域食育支援プロジェクト ～食と協働の学習支援～	附属坂戸高校 副校長 深 澤 孝 之	22
■ Hack My Tsukuba ～市民の市民による市民のための問題解決～	システム情報系 教授 川 島 宏 一	23
■ 博学連携による地域文化財の再生と利活用 ―土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの実践―	人文社会系 准教授 滝 沢 誠	24
■ 盆 LIVE2018	人文・文化学群 比較文化学類 小田島 実 結	25
■ 高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト 広報誌を介した地域づくり	人間系 教授 原 田 悦 子	26
■ 柔道を通じた世界の一流選手と日本の子どもたちとの国際交流	体育系 准教授 岡 田 弘 隆	27
■ スポーツを通して東北を元気にする	体育系（体育センター） 教授 山 田 幸 雄	28

防災・復興支援

■ 地域コミュニティ形成の継続的支援	Tsukuba for 311 代表 人文・文化学群 比較文化学類 小 林 彩 香	29
■ 原発事故避難者に対する自立型スポーツ・体操活動の継続支援	体育系 教授 長谷川 聖 修	30

その他

■ 農業体験学習を通じた地元小学生の農業理解の推進	生命環境系 助教 加 藤 盛 夫	31
---------------------------	------------------	----

筑波大学発—おもしろふしぎ理科実験・工作隊—

【活動地域：茨城県全域、千葉県、栃木県、福島県】

数理物質系 准教授 小林 正美

1 事業の概要

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

2 事業成果の概要

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。さらに、一般の方を対象とする企画（例えば、つくば科学フェスティバル、おとなのためのサイエンス講座、うしくみらいエコフェスティバルなど）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

3 地方自治体との連携

茨城県 つくば市教育委員会
 大子町教育委員会
 県北生涯学習センター
 水戸生涯学習センター
 県南生涯学習センター
 県西生涯学習センター
 鹿嶋市まちづくり市民センター
 乙戸南児童館
 新治児童館
 牛久市役所
 神栖市中央公民館
 守谷市中央公民館
 高野公民館

千葉県 我孫子市教育委員会
 我孫子市アビスタ



4 今後の展望

より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

平成30年度社会貢献プロジェクト

筑波大学発 -おもしろふしぎ理科実験・工作隊-

小林 正美（物質工学域・准教授） 重川 秀実（物理工学域・教授） 中村 潤児（物質工学域・教授） 木島 正志（物質工学域・教授）

背景と目的

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

成果

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。それに加え、一般の方を対象とする企画（例：つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスティバル、我孫子市市民講座など）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

出前講義写真

平成30年度 出前講義一覧

4/3（火）スプリングスクール
4/7（土）乙戸南すばる子ども会
4/22（土）科学技術週間
4/22（土）国際糖の日
6/17（日）科学技術振興財団
6/21（木）附属高校
6/26（火）取手第一中学校
7/10（火）附属駒場高校
7/11（金）日本大学習志野高等学校
7/27（金）霞ヶ浦高等学校
7/29（日）大子町教育委員会
7/31（火）紫峰ヶ丘2丁目子ども会
8/8（水）手代木中学校
8/20（月）土浦市立新治児童館
8/21（火）リケ女一日体験
8/30（木）おとなのためのサイエンス講座
9/5（水）つくば市立沼崎小学校
9/6（木）おとなのためのサイエンス講座
9/11（火）、12（水）米軍子弟高大連携
9/13（木）おとなのためのサイエンス講座
9/22（土）我孫子市民のチカラまつり2018
9/27（木）利根町立文小学校
10/5（金）県民大学
10/14（日）牛久エコフェスタ
10/12（金）県民大学
10/19（金）県民大学
10/27（土）県南生涯学習センター
10/29（月）守谷市下町・下新田子供会
11/02（金）県民大学
11/10（土）、11（日）つくば科学フェスティバル
11/14（水）守谷市立大野小学校
11/16（金）県南生涯学習センター
11/30（金）額田小学校
12/7（金）Kids Creation TSUKUBA 幼稚園コース
2/17（日）城ノ内育成会
2/18（月）納堤保育園 学童クラブ
2/26（火）釜木中等教育学校
3/3（日）土浦市桜ヶ丘小学生育成会
3/20（水）サイエンスアイデアコンテスト



今後の展望

今後も、より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

超小型人工衛星の開発と利用を通じた 体験実習型科学教育による地域・社会貢献プロジェクト

【活動地域：茨城県つくば市】

システム情報系 准教授 亀田 敏弘

1 事業の概要

筑波大学が開発して H-IIB ロケットにより打ち上げられ 2017 年 1 月 16 日に ISS「きぼう」から放出された超小型人工衛星 ITF-2 と構想中の超小型低価格衛星 ITF-3 を題材に、総合理工学分野の体験実習型教育を行い、小中高生ならびに一般市民に対する科学振興を行った。また、アンテナ製作と気象衛星 NOAA の信号受信を題材に、リモートセンシングの基礎についての講座を実施した。地域・社会貢献を通して科学の街つくばの拠点である本学の魅力を伝えると同時に、本学学生のサイエンスコミュニケーション能力の涵養も重視した。

2 事業成果の概要

昨年度の実績をもとに、つくばエキスポセンターでのイベント、ならびに、埼玉県三郷市の地域イベントと協力・共催で小中高生や一般市民に対する事業を実施した。昨年度好評であった超小型人工衛星の説明に加えて、気象衛星 NOAA の信号受信をするためのアンテナ製作と、実際の信号受信によるリアルタイムのリモートセンシングを体験するプログラムを行った。本事業を通して中学・高校生を育てる機会であることはもちろん、大学生のサイエンスコミュニケーション能力を高める機会としても重要な位置づけであることを確認した。



アンテナ製作風景

また、一般の人々にとって、気象衛星の送信信号を手作りのアンテナで受信できることから得られる感動

は大きく、科学技術への興味喚起の効果が大きく、理科離れにブレーキをかけるための一策としての宇宙コンテンツの活用は有効と感じられた。



NOAA 信号受信体験



参加者

事業実施状況

日 程	2018 年 8 月 18 日 (土)
時 間	10:00 集合 - 16:00 解散
場 所	つくばエキスポセンター 2 階 イベント会場
講 師	筑波大学衛星プロジェクト学生 5 名、亀田 (計 6 名)
参加者	7 名
実 施 テーマ	超小型衛星、衛星信号受信、無線工学の基礎、 リモートセンシングの基礎

3 地方自治体との連携

つくばエキスポセンターとの連携により、地域の中学校と一般からの参加があった。

4 今後の展望

本年度は埼玉県三郷市からの引き合いがあり、取り組みを広げていければと考えている。

地域社会貢献のための小中高校生への理科教育啓発活動

【活動地域：茨城県つくば市】

数理物質系 准教授 後藤 博正

1 事業の概要

つくば理科学シンポジウム、高校生英語口頭研究発表の部（IWP2018 高校生の部）、高校生向け理科実験講座およびつくば科学フェスティバル出展を行った。



つくば理科学シンポジウム

2 事業成果の概要

出前実験では

- 1) タمامシ液晶の作製
- 2) 静電気センサーの作成
- 3) 導電性高分子ポリアニリンの合成実験
- 4) クロマトグラフィーの基礎実験
- 5) ラジオの製作
- 6) モアレ干渉縞などの体験型実験に加え
- 7) ボコーダー
- 8) テルミンなどの作動原理説明を行った。

さらに高校時から求められる国際化に対応し、TGSW2018（つくばグローバルサイエンスウィーク、つくば国際会議場）の一セッションで「理科研究発表ワークショップ、高校生英語口頭発表の部（IWP2018 高校生の部）」を設け、これを行った。このワークショップでは日立一高、水戸一高、緑岡高校、竹園高校、常総学院高等学校、水海道一高による県内からのレベルの高い最先端の研究発表が英語で行われた。発表後の高校生へのコメントは、英語で行った。閉会式では、Dr. Rafael Kiebooms 氏の講評の後、Kiebooms 氏の選出した賞を壇上で授与した。本活動を通して高校生の国際化、および応援を十分に行うことができたと思われる。会議は進行も含めてすべて英語で行われた。



高校生英語口頭研究発表の部



つくば科学フェスティバル

また一般市民向けの研究ポスター展示および理科実験を同時に行う「つくば理科学シンポジウム」を開催した。茨城県内各高校、つくば市内の中学校、茨城県教育庁学校教育部、つくば市教育庁とこれからも連携を深め活動を行っていききたい。

多様な人々に対応できる自然観察環境整備

【活動地域：長野県上田市】

生命環境系（山岳科学センター） 教授 石田健一郎

① 事業の概要

山岳科学センター菅平高原実験所には約 200 種の樹木が見学できる樹木園があり、夏季を中心に多くの市民が訪れている。当園ではカラフトイバラやクロビイタヤなどの氷河期遺存種が見られ、市民が地域の貴重な自然に直接ふれて理解を深められる場所となっている。また、当園を用いた自然観察会や講座も定期的に行なわれている。

本事業ではセルフガイド（樹木ラベル）の作成等を行い、子供から大人まで、多くの市民が一層楽しく学べるようにすることを目的とした。



樹木園見学の様子

② 事業成果の概要

樹木園に設置するセルフガイドについて、当初はラミネート紙を使った作成を検討していたが、当地域の厳しい気象条件や紫外線による印刷劣化を考慮し、耐候性の高い植物名ラベルを 38 種の樹木について計 53 枚導入した。これまでは 5 ha にわたる園内においてラベル設置木のばらつきがあったが、新規ラベルを導入したことで、過去に当所ボランティアスタッフ「菅平ナチュラリストの会」が手作りしたラベル約 130 枚等を合わせ、園内の大部分にほぼ均等に設置することができた。これによって、見学者の満足度向上や学びの深まりが期待できる。

また、当所の位置する菅平高原はスポーツ合宿や林間学校利用が盛んな地域であるが、その利用は夏場に極度に集中してしまっている。これまで当園既存のラ

ベルのうち約半数は耐候性の低さから冬期に撤去していたが、新規ラベルは通年設置可能であるため地域の自然の魅力をオールシーズン発信でき、地域活性化にも有効だと考えられる。

なお新規ラベルには学名も表記し、近年増加している留学生へも配慮した。

さらに、当所にはボランティアスタッフ「菅平ナチュラリストの会」のメンバーが中心となって 2012 年に製作した、樹木園ガイドブック「この木なんの木」がある。当冊子について今回分類体系を APG Ⅲ・Ⅳに統一するとともに、「菅平ナチュラリストの会」の協力のもと内容の一部改訂を行なった。これによって、見学者がセルフガイドと冊子を参考にしながら自然観察をより楽しめるようになると考えられる。

③ 地方自治体との連携

セルフガイドの作成と設置、及び冊子「この木なんの木」の改訂にあたっては、当所ボランティアスタッフである「菅平ナチュラリストの会」（長野県上田市近隣在住、約 20 名）に協力いただいた。

④ 今後の展望

より多くの市民に今後も樹木園を利用してもらうため、セルフガイドについては引き続き必要箇所に設置を増やしていく。また、当園において開花や結実といった季節ごとの情報を展示したり、林床の草本や地衣類、野生動物の痕跡等樹木以外のものにも簡易的な解説板を設置したりするなど生きた情報をきめこまやかに発信し、市民が一層学びを楽しめるようにしたい。



左が今回新たに設置したラベル、右は「菅平ナチュラリストの会」が作成したもの



ポールで設置するタイプ



樹木園パンフレット「この木なんの木」

学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループSCOUT～

【活動地域：茨城県つくば市等】

生命環境系 助教 Matt Wood

① 事業の概要

筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ・スカウト（SCOUT：Science Communication of the University of Tsukuba）として平成21年4月にスタートして以来、活発に活動が続けている。

スカウトは、地域に対する社会貢献としての科学あそびラボを多数開催しており、学生たちのサイエンスコミュニケーション実践の場としての意味も非常に大きい。ここ数年サイエンスコミュニケーションの重要性が叫ばれるが、学生が実際に経験する場は少ない。その意味で子どもたちに対して科学を伝える「科学あそびラボ」は学生にとって非常によいトレーニングとなっている。

② 事業成果の概要

科学技術週間に行われる筑波大学キッズユニバーシティおよび国際植物の日に、「科学あそびラボ」として、小学生を対象にした科学実験を行った。また、筑波大学と連携している大子町の中学校の来学時に、科学実験を行った。

平成28年度からは、つくば市内での活動を増やしている。LALA ガーデンつくばのTSUTAYA 書店やBiVi つくばの筑波大学サテライトオフィスで主に小学生を対象とした科学遊びラボを開催した。全イベントでの参加者数は400名を超える。

7月にはNHK 総合「ごごナマ」にSCOUTの学生が出演し、科学実験を行った。

開催日時	内 容	参加人数
ララガーデン つくば 2018.12.25	水とインクでレイ ンボーアート	60名程度
BiViつくば 筑波大学サテラ イトオフィス 2018.12.26	フェルトツリーに 雪を降らせよう	30名程度
日本科学未来館 サイエンスコミュニケーター (SCOUT・OB)ワークショップ 「科学技術で探れ！リアル謎解きゲーム ～ただ、宇宙の果てを見たかった～」 2019.3.27		筑波大学学生 12名

③ 地方自治体との連携

大子町と筑波大学の連携事業に積極的にかかわっている。またキッズユニバーシティには、つくば市内の小学生が多く訪れており、筑波大の学生との交流も深めている。



キッズユニバーシティの様子

開催日時	内 容	参加人数
筑波大学キッズ ユニバーシティ 2018.4.21	ショウノウ船で遊 ぼう	200名程度
大子町中学生の 筑波大学訪問 2018.7.24	スパゲティタワー	10名
いばらき子ども大学 2018.8.25	人工イクラで実験 しよう	40名
ララガーデン つくば 2018.8.26	光の万華鏡	80名程度

④ 今後の展望

筑波大学サテライトオフィスでの実験教室など、活動の機会を増やしている。科学遊びラボの企画、運営をほとんど学生のみで行った。学生にとっても、イベントの企画、運営を行い、多くの人と関わることはいい経験となっている。

大学院生による国内外における学術的交流の促進

【活動地域：茨城県つくば市】

システム情報工学研究科 博士後期課程 讃井 知

① 事業の概要

「つくば院生ネットワーク (TGN)」は学園都市つくばの学術的なインフラ作りを目指しサイエンスコミュニケーションの促進を行ってきた。2010年の発足以来、特に筑波大学発の知見の地域・社会への発信と、異分野交流による創発的な学びの場の提供をしている。

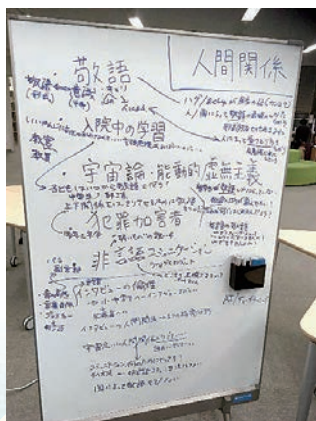
② 事業成果の概要

例年行っている取り組みに加え、新しい取り組みとして本年度は3つのイベントを行った。

一つ目は「学生プレゼンバトル」の英語版コンテストを Tukuba Global Science Week にて行った。英語によるプレゼンテーションイベントの企画は初めての試みであったが、世界各国から集まった聴衆につくばの学生による研究を発信することができた。



TGSW2018でのプレゼンテーションイベント会場の様子



二つ目は「つくばのカルチャー・ラタン」という取り組みである。これは一つのテーマに対して異なる研究分野の立場から論じ、議論するというものである。

(写真) 分野横断的に「人間関係」について議論している様子

この取り組みはテーマを変えて今後も定期開催し、シリーズ化する予定である。

三つ目の新しい取り組みとしては、TGNの組織について伝える冊子の作成を行った。

③ 地方自治体との連携

地域社会に対して研究成果の発信イベント(『学生プレゼンバトル』)を行ったり、日本でも数少ない視覚障害・知覚障害の方が高度専門教育を受けることができる筑波技術大学の学生の方と協働し、イベントの企画準備などを行った。つくばらしい新しい学びの場を創ろうという試みを継続的に行っている。

また、団体の構成員としても他大学の学生が参加したり、つくばの研究機関に勤める社会人の方から取材をうけたことから、TGNが行ってきた開かれた活動がつくば地域に浸透してきた一つの成果だと考えられる。



中央図書館にて地域の方を含む聴衆に研究発表している様子

④ 今後の展望

さらなるつくば学園都市の科学コミュニケーションの促進にむけて、例年行っている企画の運営に加え、新たな挑戦をする予定である。2019年は若手研究者の国際会議である第一回筑波会議が開催されることから、弊団体は学生企画を運営するための準備を進めている。

また、障碍の有無にかかわらず学びの場の提供を目指し、手話で物理学を学び、また手話によるパフォーマンスを地域の方に楽しんでいただく公演を行う予定である。

環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系 教授 田村 憲司

① 事業の概要

本プロジェクトは、環境に対する正しい知識と技能を身につけ、地域社会において環境教育や環境保全の指導者となる市民を育成する事業である。つくば市の水・土・生物などの自然環境、文化・都市環境を習得テーマとし、地域特性の高い環境教育を行う。本事業により認定を受けた環境マイスターはつくば市やNPOが実施する各種事業の中核となって活躍し、市民の環境意識向上及び環境保全活動への積極的な参加に努めるようになる。

② 事業成果の概要

今年度も昨年度と引き続き「SDGs」をテーマとしたマイスター講座を以下の日程で行った。今年度より、1年で環境マイスターを育成する新たなプログラムを実施し、5月27日に書類審査で合格した市民の方の面接を実施し、面接試験に合格した3名の市民の方を対象にして本講座を実施した。

第1回 SDGs 講義

（講師：田村 憲司）6月10日（日）

第2回 研究計画発表

（講師：田村 憲司）7月8日（日）

第3回 SDGs 企画展視察（JICA 地球広場）

（講師：田村 憲司）7月29日（日）

第4回 つくば市内緑地実習

（講師：上條 隆志）9月16日（日）

第5回 研究中間発表

（講師：田村 憲司）10月14日（日）

環境マイスタースキルアップ講座：SDGs

（講師：小林健一郎）2019年2月3日（日）



SDGs 企画展視察（2018. 7.29）



環境マイスター認定希望者の最終発表会（2019. 2. 3）

③ 地方自治体との連携

本事業は、つくば市と筑波大学との連携事業であり、受講生のうち、一定の条件を満たし審査に合格した者は、環境マイスター認定証を授与される。本年度も、2019年3月22日に本学学長応接室において授与式が行われ、つくば市の五十嵐市長ご出席のもと、永田学長から環境マイスターの認定証が授与された。



認定証授与式（2019. 3.22）

④ 今後の展望

本事業は、開始から環境マイスター認定証取得者は27名となり、着実に成果を上げてきている。つくば市側の所管部局である環境政策課も、環境マイスター授与者の活用方法について、積極的な活用を進めている。現在、当事業修了者が中心となって立ち上げた、環境マイスターの会の活動も里山ウォークなど定期的に行われ、つくば市における環境関連取り組みの推進役になっている。本事業が本学の社会連携活動の一翼を担うものとしてより発展することが期待されている。

「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的发展 2018

【活動地域：茨城県取手市】

生命環境系 助教 丸尾 文昭

1 事業の概要

「いもりの里」では、関東平野の典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践している。本事業では「いもりの里」（地域の宝／サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら、周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援する。



図. いもりを育てる田んぼの田植え（5/27）

2 事業成果の概要

これまでの活動を通じ、地域住民サイドからは「いもりの里」の継続活用と維持継承を望む声が、行政サイドからは類似の事業展開を探る声が強いことが分かった。そこで初期整備を終えた「いもりの里」をモデル拠点として本格的に活用・維持しながら、科学学習支援や周辺地域への拡充計画策定支援・提言を継続的に実践している。

田植え・稲刈り・収穫祭等の様々なイベントや生命環境関連の様々な総合学習プログラムは、いもりの里協議会が中心となって、行政、教育委員会・学校、地域住民の協力も得ながら、年間12回開催した。

表. 平成30年度 いもりの里年間行事

開催日	内容	参加人数
4/15(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 草もち作り、春の花・いもり観察	雨天中止
5/6(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 どろんこ田んぼ運動会、ザリガニ釣り	78名
5/27(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 田植え、田んぼの生き物観察	70名
6/17(日)	取手いもりの里 生き物観察会 土壌生物観察、いもり観察	57名
7/16(月祝)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 竹細工(竹水鉄砲)、ザリガニ釣り(外来生物について)	66名
8/5(日)	取手いもりの里 星空の下の科学教室 講演会、灯火観察	34名
9/17(月祝)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 稲刈り、いもり観察	83名
10/21(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 収穫祭(主催: 田舎・上高井地区農村環境活用推進協議会)	91名
11/18(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 葉っぱスタンプ	44名
12/16(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 クリスマスリースづくり	21名
1/27(日)	取手いもりの里 生き物観察会 鳥の観察	21名
2/17(日)	イモリ学習会(筑波大学) 再生の不思議、イモリの卵や幼生観察、イモリ幼生の飼育	40名
3/24(日)	取手いもりの里 谷津田・里山体験 デイキャンプ	35名

3 地方自治体との連携

取手市役所まちづくり振興部を中心に「いもりの里」の候補地選定時以来12年にわたり支援をいただいている。取手市から地元（いもりの里協議会）への公募補助金が継続的に採択されているほか、イベント運営スタッフへの市役所職員の方々の参加、有害外来生物（アライグマ）の駆除など、地域住民との3者間で連携した円滑な協力体制が確立している。また、2019年11月10日に「いもりの里」事業10周年記念の市民公開講座を取手市の施設で実施する計画が確定した。

4 今後の展望

小学校児童を中心に家庭でのイモリ幼生飼育体験プログラムも数年に渡り提供しており、卵から成体イモリまで立派に育て上げて、いもりの里に放流するまでになっている。今後は、イモリネットワーク・ジュニアとして対象家庭や対象校を拡充し、「いもりの里」を生命環境教育の拠点としてもさらに発展させていく。また、世界で唯一のアカハライモリ・ストックセンターとしての役割（Nature Protocols 6:593-599, 600-608, 2011 ほか）に記載）も益々重要になってくると思われる。イモリ野外生態観察場で実施してきた追跡調査の知見を生かし、繁殖環境の整備にも力を入れている。

5 その他

ポートフォリオはイモリネットワーク（Japan Newt Research Community）のWebページに随時掲載
<http://imori-net.org/>

住民主導による健康減量教室の普及

【活動地域：茨城県土浦市】

体育系 准教授 中田 由夫

① 事業の概要

本事業で養成した「土浦市ダイエットリーダー」が地域住民に向けて減量支援を担う「住民主導型健康減量教室」を2015年度より茨城県土浦市において開催し、その成果検証を進めてきた。

② 事業成果の概要

◆新たな取り組み

“土浦市ダイエットリーダー 30 (TDL30)”

これまで減量支援ボランティアとして、約70人の土浦市ダイエットリーダーを養成してきたが、自治体や大学側の関わりを縮小化し、ボランティアが自立して、自発的に活動を継続できるようにすることを目指し、土浦市ダイエットリーダー 30 (TDL30) を結成した。TDL30 には2015～2017年度の養成講習会修了者のうち30人（内2人が休会）が参加を表明している。

“健康減量教室卒業生対象のフォロー教室”

TDL30 が中心となり、2016～2017年度土浦市健康減量教室の参加者を対象としたフォロー教室を開催した。フォロー教室の主な内容は、参加者各々の近況報告とリバウンド防止を目的とした筋力トレーニングであった。TDL30 に所属するダイエットリーダーの中には、運動普及推進員として運動指導経験が豊富な者や、看護師、教員免許などの資格を有している者が多く存在する。このことから、減量支援やリバウンド予防をする上で、専門家にも劣らない健康支援を提供することが期待できる。

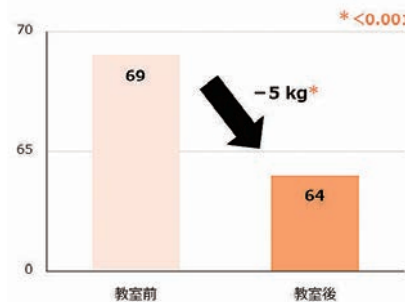
“教室参加者のダイエットカルテの導入”

健康減量教室では、参加基準を満たさない70歳以上の市民や、疾病を有する市民を柔軟に受け入れられるようにした。事前問診で疾患の治療有無などを聞き取り、定期通院している市民（特に糖尿病を治療中の者）には主治医に許可を得た上での参加を促した。このような背景から、教室参加者のダイエットカルテを作成し、ダイエットリーダー間で情報共有ができるようにした。これにあわせ、ダイエットダイアリー（食事日誌）の記入内容から理解度を確認し、教室ごとに

評価した。さらに、グループワーク時には、理解度別にグループを作り、そのグループの理解度に合わせて支援した。健康減量教室は、1教室あたり20～30人が参加する集団型の教室だが、教室参加者一人一人の年齢、健康状況や理解度に寄り添うことで、オーダーメイドの住民主導型減量支援を目指した。

◆減量支援の成果

TDL30 に所属するダイエットリーダーが減量支援を担い、一中地区と都和中地区の2つ地区で健康減量教室を開催した。合計52人が参加し、42人が3ヵ月後の測定会を完遂した（81%）。本報告書では、参加基準（20歳以上69歳以下、BMI 25 kg/m² 以上40 kg/m² 未満）を満たし、研究協力の同意を得られた26人（男性4人、58〔標準偏差 10〕歳、BMI 27.5〔2.3〕kg/m²）のデータを示す（図1）。体重減少量は4.9〔2.2〕kgと有意な変化が認められ、

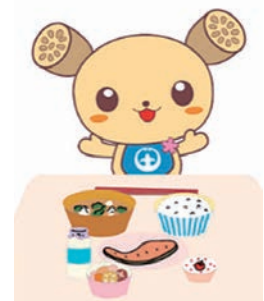


（図1）教室参加者の体重変化

初期体重から5%以上減少した者は26人中18人（69%）、10%以上だった者は、6人（23%）であった。

③ 今後の展望、地方自治体との連携

本事業は継続する予定であり、2019年度で当初計画した土浦市内8中学校地区での教室開催は終了となる。今後は、TDL30 が中心となり教室を企画運営できるよう準備を進めていく予定である。



土浦市イメージキャラクター
つちまる

摂食障害の早期発見・早期治療、医療連携、社会復帰を目的とした総合的な疾患啓発と疾患教育

【活動地域：茨城県】

附属病院 病院講師 塚田恵鯉子

1 事業の概要

摂食障害は難治の慢性疾患ですが、早期発見・治療、適切な支援により予後は改善します。しかし、その認知度は低く、学校と医療機関、医療機関間での連携も困難な状況です。さらに、摂食障害患者および家族を含めた支援者への疾患教育も十分とは言い難いです。そのため、疾患の理解を促す目的で、絵本、イラスト、動画を作成し、それらを用いて学校、医療者、摂食障害の患者および家族を対象に、疾患啓発、疾患教育を行いました。

2 事業成果の概要

1) つくば地区勉強会

つくば地区で養護教諭との勉強会を平成 29 年 11 月 27 日から定期的で開催しており、平成 30 年度も継続しています。症例検討会、コミュニケーションに関する講義とロールプレイ、グループワークなどを行いました。

2) 医療機関、教育機関での講演

2018 年 5 月 24 日に精神科病院の石崎病院、2018 年 11 月 6 日に日立総合病院の小児科において、摂食障害の一般的な知識、入院治療、対応方法について、精神神経科医師、看護師、心理士により、講演を行いました。今後も症例検討会などで医療連携を強めていく予定です。

2018 年 10 月 26 日には、県立友部特別支援学級において、「摂食障害への理解と対応」の講演会を行いました。

3) 絵本の製作

神経性やせ症の「気づき」を促す目的で、「虹色のキャンディー」というタイトルの絵本を作成しました。当院の精神神経科病棟、小児科病棟、図書室、および近隣の精神科病院、クリニック、患者、患者家族、患者関係の教育機関などに配布しました。

4) イラストの製作

講演会や家族教室、疾患教育での使用目的として、イラストを作成しました。

5) 回復者のインタビュー撮影

神経性やせ症の回復者のインタビューを撮影し、神経性やせ症の家族教室で用いました。



(左：つくば地区勉強会、右：講演会)



(絵本「虹色のキャンディー」)

3 地方自治体との連携

講演会や勉強会を通じて、医療機関、学校、養護教諭との連携を強化しています。

4 今後の展望

病気の概念が理解しにくいいため、絵本などの理解しやすいツールを作成し、疾患啓発や教育に用います。また、医療機関、学校、養護教諭との連携を強化するだけでなく、一般の方への疾患啓発もすすめていきます。さらに、家庭での孤食がコミュニケーション不足を引き起こし、摂食障害の発症や発見の遅れに関与している可能性もあり、共食の重要性を広める目的で料理教室を開催します。また、摂食障害の背景にコミュニケーションや自己主張の苦手さがあることも少なくないため、一般の方、患者・患者家族を対象に非言語によるアートセラピーを催します。

5 その他

活動を通じて、医療機関や学校関係者の知識だけでなく、意識の変化を実感しております。私たちの活動が、摂食障害だけでなく、精神疾患への理解の一歩となることを確信しております。

『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2018』 ～小学生対象の医療現場体験ツアー～

【活動地域：茨城県つくば市】

附属病院 看護師 渡辺小百合

① 事業の概要

小学校高学年の子どもたちを対象とした講義を受けながら医療に関わる様々な最先端領域を実体験できる『キッズメディカルユニバーシティ』を夏休み期間中の2日間で開催した。

- 1) 薬 学：薬に関わる酵素の効能を知る実験
- 2) 看護：看護師と共に採血・バイタルサイン測定・心電図測定の実習
- 3) パラスポーツ：パラスポーツ（車椅子バスケ）の体験及びパラリンピアンによる講演
- 4) 外科：心臓外科医と共に豚の心臓を用いた模擬心臓手術や最先端の医療技術体験
- 5) 栄養：病院食を食べながらの栄養士からの食育学習
- 6) 救急看護：フライトナースによるドクターヘリに関する講義学習
- 7) 宇宙医学：JAXA フライトサーजनによる講演や仮想宇宙体験
- 8) 災害医療：体感型防災アトラクションの体験活動を通じて災害医療について実習
- 9) 救急医療：救急医・医学生と共に心肺蘇生体験



② 事業成果の概要

大学の知的財産をフルに利活用する事で対象者である小学生が実際の医療現場の模擬体験から『身体のしくみや命の大切さ・人への思いやり』を熟考できた。同時に多様な感覚・期待をもつ子供達に『未来の医療人を目指すためのプロローグ』の場を提供し得た。



③ 地方自治体との連携

近隣地域（筑西市・土浦市・阿見町・かすみがうら市）4市の教育委員会を通じて本企画のチラシを事前配布したところ定員（各回 30 人の2回開催）を大幅に上回る応募があった。



④ 今後の展望

参加者及び実施者からの企画結果アンケートの返答を詳細に分析し、収集データ数が希少と言われている対象者が小学生の『科学技術リテラシー涵養活動』の体系化と新たな学習プログラムの開発に還元させたい。



⑤ その他

本企画の内容は各種 SNS や読売新聞に掲載された。



Tsukuba Kids Medical University

つくばキッズ メディカルユニバーシティ



もしかしたら、未来の自分に会えるかも。



第1回 2018 7月27日(金) 第2回 8月17日(金) いずれも 9:00~17:00

会場：筑波大学附属病院(つくば市天久保2-1-1)

●募集人数：各回30名

筑西市、土浦市、阿見町、かすみがうら市のいずれかに
在住の小学校5・6年生対象

●費用：無料

●持ち物：筆記用具、水筒

- 応募方法： 当院WEBサイト(www.hosp.tsukuba.ac.jp)新着情報の
応募フォームからお申込みください。応募は6/22(金)締切と
させていただきます。参加者は厳正なる抽選により7/6(金)まで
に当選者へご連絡します。但し、参加者は各小学校1校につき
最大2名までとさせていただきます。

- お問合せ先：つくばメディカルキッズユニバーシティ事務局
(筑波大学心臓血管外科内) ☎029-853-3097(10:00~17:00)

※当日は動きやすい服装をお願いします。 ※送迎はご家族の方をお願いします。
※昨年までの様子はこちらをご参照ください。(https://www.facebook.com/tsukuba.heart/)

プログラム

第1回
7/27
9:00~17:00

薬剤セミナー
看護セミナー
バラスポーツセミナー
外科セミナー

第2回
8/17
9:00~17:00

救急看護セミナー
宇宙医学セミナー
災害医療セミナー
救急医療セミナー

※7月27日の回にはメディア取材が
入る可能性がありますので
予めお知らせください。

平成30年度 筑波大学 社会貢献(地域貢献)プロジェクト

筑波大学附属病院
University of Tsukuba Hospital

2019 茨城国体に向けたジュニアアスリートへの メディカルサポート

【活動地域：茨城県】

医学医療系 講師 鎌田 浩史

1 事業の概要

2019 年に茨城で国民体育大会（国体）が開催される。茨城県は地元開催であり、アスリートの強化をはかり天皇杯、皇后杯（優勝）獲得を目標としている。国体はスポーツ活動を積極的に実施している地域のジュニアアスリート（中・高校生）にとっては非常に大きなイベントであり、この大会への意気込みは言うまでもない。

そこで、国体に向けて強化指定のジュニアアスリートに対して、医学医療系と体育系が連携しメディカルサポートを実施する。選手の多くは茨城県内より選出されるため、これらのアスリートのメディカルサポートとして筑波大学が介入することは、茨城県内での幅広い地域サポートとなる。

い潜在的なリスクについて、問診や診察によるアドバイスをすることができ、選手は安心して大会に臨むことができた。



ジュニア選手に実施したメディカルチェック

2 事業成果の概要

茨城県内での合宿や大会にスポーツドクター・トレーナーが出向き、選手の状態を確認し、医学的アドバイス、治療などを実施する。必要に応じて地域の病院と連携して医療的補助のコーディネートを行った。

★ 2018 年度に実施したメディカルチェック

（合宿や練習会場にスポーツドクターが出向き、個々のメディカルチェックを実施した）

競技名	日付	種別	人数
弓道	6月24日	全	22
体操	7月7日	全	14
水泳（飛込）	7月8日	全	8
水泳（水球）	7月8日	少男	12
水泳（AS）	7月14日	少年	7
サッカー	7月15日	成男	3
サッカー	7月21日	成女	5
スケート（スピード）	7月22日	少年	3
なぎなた	8月11日	全	7
弓道	9月1日	全	8
水泳（競泳）	9月1日	少年	15
陸上	9月17日	全	23
アイスホッケー	11月28日	少年	20
カヌー	12月10日	少年	16

選手が競技を行う上で抱えている身体的不安要素や、現行で実施しているアンケート調査には現われな

3 地方自治体との連携

この事業は、茨城県（国体競技力向上対策室）および茨城県体育協会医科学委員会の協力の下で実施することができた。希望するいくつかの競技団体に対してメディカルチェックを行い、大きな成果を得たものと思われる。

4 今後の展望

国体は、2019 年だけでなく毎年開催され、規模や取り組みこそ違うものの、脈々と進んでいくものであるため、茨城国体開催以降も引き続き地域と連携を継続し、サポートを定着させたい。このようなスポーツ医学の連携は本大学ならではの特徴であり、地域のみならず、日本のスポーツ界に貢献するプロジェクトである。

今回は、おもに整形外科および内科的な内容の実施となったが、長期的なサポートに向けて、婦人科、スポーツ心理、歯科に関してもサポート体制を強化し、さらに充実したメディカルチェックを実施したい。

アルコール健康障害対策における茨城県の 対策推進プロジェクト

【活動地域：茨城県北茨城市】

医学医療系 准教授 吉本 尚

① 事業の概要

アルコール健康障害対策基本法が2015年に策定されたことを受け、茨城県のアルコール健康障害対策推進計画が2018年3月に制定される。本取り組みは、茨城県下の同対策の推進のため、地域の医療機関でのアルコール関連問題のスクリーニング、介入、紹介のシステムを北茨城市民病院附属家庭医療センターで開発するとともに、医療・保健・福祉ネットワークの構築を図り、他の地域の参考になるモデルを提示する。

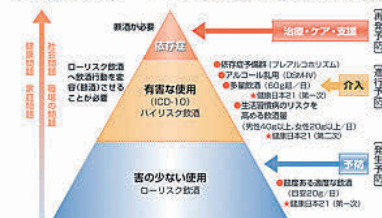
② 事業成果の概要

地域の医療機関でのアルコール関連問題のスクリーニング、介入、紹介のシステムに関しては、代表者である吉本が分担研究者で参加している厚生省研究班やAMED研究班などの研究成果を参考に、平成31年1月17日（木）より、一人ひとりの健康リスクを考慮し、本人により適した飲酒量目標と一緒に考え行動変容に繋げていく「飲酒量低減外来」を北茨城市民病院附属家庭医療センターに開設した。本外来は、過剰な飲酒による有害事象を減らすため、一人ひとりに最適な飲酒量についての情報を提供し、よりよい健康行動に繋げていくための総合診療医による外来で、精神科領域以外では「日本初」の取組みとなった。この「飲酒量低減外来」は総合診療医によって提供され、具体的には、飲酒習慣を調べるため、AUDIT（アルコール使用障害スクリーニング）と呼ばれる質問票に回答いただいたのち、アルコールが体内に残っていないかアルコール呼気チェッカーを行い、面談を行える体調かどうかを確認する。その後、面談、採血検査などを通して、最適な飲酒量について検討、評価し、行動変容を支援していく。診察により重度のアルコール依存症が疑われた方に関しては、専門的な評価・治療のため、精神科外来の受診を勧めさせていただく方針を取り、周辺の精神科と連絡を外来開設前に取り、連携を図った。茨城新聞、読売新聞、朝日新聞、日本経済新聞、日経産業新聞等から取材を受け、掲載されるなど、関心を集めている。

内科での飲酒量低減外来とは

1、危険な使用/有害な使用に焦点を当てた外来治療

2、軽度アルコール依存症の治療の補完



アルコール依存症を対象とした専門医療機関は全国に複数箇所ありますが、健康を害する可能性があるハイリスクな飲み方（図の黄色部分）や軽度のアルコール依存症に該当する方を対象とします。リスクの低い飲酒（図の青色部分）になるよう、適切な介入をすることが必要となります。

引用：アルコール健康障害対策基本法推進ネットワーク <http://a1honet.jp/background.html>

家庭医療センターでの 飲酒量低減外来の流れ



- ✓ 飲酒量低減外来は毎週木曜日 午前10時～11時30分です。
- ✓ 完全予約制で、通常の保険診療の範囲で外来を行います。
- ✓ アルコール依存症を強く疑う場合、専門医療機関を紹介する可能性があります。

③ 地方自治体との連携

飲酒量低減外来の設置に関しては、市立医療機関での設置ということもあり、市長をはじめ北茨城市の関係各位の承認を得て行われた。医療－保健－福祉ネットワークの構築に関しては、本年度は同市の関係部署とのミーティングを複数回行い、今後の戦略について議論を重ねているところである。

④ 今後の展望

代表者が2019年度から、茨城県アルコール健康障害対策推進計画の評価検討会議委員に指名されたため、茨城県のアルコール健康障害対策推進に直接発言できる可能性がある。北茨城市で実践した飲酒量低減外来のノウハウについて全県・全国展開を今後行っていくとともに、医療・保健・福祉ネットワークの構築を進めていきたい。

哲学カフェによる地方創生

【活動地域：東日本・九州の震災被災地域および岩手県を中心とする過疎地域】

人文社会系 教授 井川 義次

1 事業の概要

過疎に悩む地域は多い。岩手県はその大きな問題を抱える一つの地域である。本事業は、一昨年以来、岩手県花巻市を中心として「哲学カフェ」、特に「ホール・システム・アプローチ」によって、単発のワークショップではなく、町を出て都会に行きたいと考える高校生／町に残る高齢者／市の活性化を望む一般市民／行政担当者の間に、主体的に話し合い、直面する問題を自分たち自身で解決していくための、持続的で生成的なシナプスを形成してきた。平成 30 年度はそのシナプスをさらに根付かせるアプローチと共に、花巻での本取組みを知った山田町（震災で大きな被害を受けた太平洋沿岸部の町）からの要請に応じて「哲学カフェ」による過疎地活性化に着手した。山田町は花巻市以上に大震災以後加速する人口流出と深刻な高齢化に直面している。過疎地活性化と新しいコミュニティの形成に「哲学カフェ」の手法を用いて貢献することが本プロジェクトの目指すところである。

2 事業成果の概要

「哲学カフェ」、特に「ホール・システム・アプローチ」とも呼ばれるわれわれの手法は、地域再生に非常に有効な手法としてアメリカや横浜市などでも使われているが、対話のプロセス・デザインが複雑であること、実際のファシリテーションが困難であることから非常に高額のコストを伴うものとなっており、財政難を抱える過疎地域では導入されていない。このアプローチはわれわれ「哲学カフェ」の得意分野であることから、花巻復興のマルカンプロジェクトを立ち上げた高校生の大江郁美さん、花巻家守舎、元花巻北高校長の下町寿雄氏、岩手県教育委員会の鈴木徹氏、岩手県沿岸部山田町山田高校の泉徑宏氏などとの協力のもと、花巻市では市民間対話（3回）、山田町では高校の特別プロジェクトとしての全校対話（1回）を行い、市民および高校から非常に高い評価を得た。

平成 30 年度はさらに、本活動を聞きつけた、岩手と同じく過疎と地域活性化の問題を抱える九州大牟田市、また震災からの復興を目指す熊本市からも、「哲学カフェ」による地域活性化の要請があり、大牟

田市（福岡明光学園高校）・熊本市（熊本現代美術館での一般市民・高校教員を対象とするもの）において、岩手方式の「哲学カフェ」を行なった。熊本市で行なった「哲学カフェ」には県内だけではなく福岡・長崎・鹿児島等からも多くの市民・教職員が参加し、「哲学カフェ」や「ホール・システム・アプローチ」の手法を学ぶと共に、「哲学カフェ」において自らの問題や地域の問題を共有することを通して職業や居住地の差異を越えるつながりを生み出すことができた。こうした枠を超える横の連携をもとにした「地域に閉塞しない地方創生の連帯」は、今後、日本が地方創生を全国的に進めていく上で最も重要な鍵であるとされている。現実にこの連帯形成に寄与することができたことは、平成 30 年度本事業最大の成果である。



哲学カフェの様子

3 今後の展望

成果概要で述べた通り、地域を超える広い横の連帯を形成していくことが日本全体の地方創生を進めていく上で最も重要な鍵である。そして地方創生を進めていくことは、ポートランドの例を待つまでもなく、単に過疎地だけでなく、首都圏を含めた日本全国の生活満足度を高める上で必須のことである。今後は首都圏を含む全国の地域をつなぐ地方創生の連帯を、「哲学カフェ」を通して形成していくことが課題である。

アートと英語に親しむ「夏休みアート・デイキャンプ &アートたんけん隊 2018」の実施

【活動地域：茨城県つくば市】

芸術系 教授 太田 圭

1 事業の概要

平成 20、21 年度の文化庁支援事業を引き継ぐ形で採択されてきた本プロジェクトは、途中から（公財）つくば文化振興財団、つくば市と連携して実施し、平成 30 年度で 11 回目を数えた。企画の背景には、小中学校で学ぶ、「図画工作」や「美術」の授業時間数の減少化によって、長い時間をかけてものを見て描くことや、実物の作品を鑑賞するといった、表現や創造性、感受性などを育む経験が乏しくなっていることへの危機感がある。それらに対して、本学の芸術に関わる人的財産（教員と学生）と芸術資産（学内の展示作品、学生アトリエ）を活用する本プロジェクトを通し、創造的で、豊かで自由な心を持つ人間形成に資することを目的とした。今回は「グローバル化」を意識して、モチーフや色の名前などを簡単な英単語を参加者との対話に用いるなど、英語にも美術にも親近感を持たせるというプログラムを試みた。2日間で約 350 名の参加があり、科学のまち、つくば市でも「情操教育」への期待があることを示していると言える。また、11 年の間に、本学の芸術専門学群入学者を輩出するなど、本学の芸術のアピールにもつながっている。

2 内容（実施内容・成果・地方自治体との連携等）

プログラムは「制作と鑑賞」を柱として、3つの催し物で構成されている。いずれも（公財）つくば文化振興財団、つくば市と連携して実施している。

【アート・デイキャンプ】（7月 21 日、22 日）体芸エリア 5C 棟の大石膏室を中心会場として、ダビデ像やニケ像等の大型石膏像、鳥の剥製や鉢植え植物などを観察して描く「写生会」であった。

【アートたんけん隊】（7月 21 日、22 日）本学内に展示されている芸術作品を大学院生が用意した「鑑賞ツール」を用いて楽しみながら鑑賞するプログラム。その他、学生のアトリエも見学した。

【夏休みアート・デイキャンプ展】（8月 21 日～26 日）会で、事前に作品審査会を開催し、優秀作品には賞を授与した（8月 21 日、表彰式）。展覧会会場は茨城県つくば美術館で、全員の応募作品を展示した（301 点）。

平成 25 年度からは「つくば市長賞」が、平成 27 年度からは「筑波大学学長賞」が設けられている。

3 今後の展望

毎年何らかの新しい試みを行うことを評価採択されながら 11 年継続して実施できてきた経験は、プロジェクトマネジメントの手法としても形になった実感がある。アートを通じた「地域活性化」及び「人材教育」を軸に、今後は代表者を若い芸術系の教員に引き継ぎながらサポートとし、本プロジェクトをビルドアップするための展開を期待していきたい。



つくさか地域食育支援プロジェクト～食と協働の学習支援～

【活動地域：埼玉県坂戸市と近隣市町】

附属坂戸高校 副校長 深澤 孝之

① 事業の概要

本プロジェクトは、筑波大学の社会貢献プロジェクトとして8年間にわたり農業体験学習支援活動が続け、近隣の小中学校の食育活動の充実に大きく貢献してきた。当該年度からは、本校農場を多目的な教育フィールドとして位置づけ、様々な特性を持った児童生徒たちが、学校や教科の枠を超えて学びあえる新たなインクルーシブ教育の場としての活用も提案した。

② 事業成果の概要

2.1 小中学校での活動（主なもの）

- (1) 小学校農業学習への出前授業
5月10日 於：市立坂戸小学校5年
- (2) 小学校 野菜栽培学習への指導助言
期間：5月～3月
対象：坂戸小・入西小・南小・大家小
- (3) サツマイモ栽培学習に関する指導助言
期間：5月～ 於：川越市立上戸小学校
- (4) 高校生との野菜栽培協働学習
期間：9月～ 於：坂戸市立南小学校菜園



高校生の指導でダイコンの種まき

2.2 本校での活動（主なもの）

- (1) 小学校5年生担当教員への栽培学習指導
4月24日 南小学校2年生担任4名
- (2) 小学校2年生 農場探索学習の実施
6月12日 南小学校2年生

- (3) 小学生の食育体験学習会の指導（坂戸市主催）
8月4日 坂戸市内の小学生対象
- (4) 小学校2年生 農場探索学習の実施
10月26日 南小学校2年生
- (5) 特別支援学級との秋冬野菜栽培協働学習の実施
（農業だけではなく様々な協働学習機会として）
9月～12月 市内外6校の特別支援学級40名



栽培した野菜の販売体験（市役所ホール）

- (6) 特別支援学級による農業体験学習会の実施
（福祉的観点で様々な効果を期待した取り組み）
10月31日 坂戸中学校特別支援学級

2.3 給食食材の提供

ニーズに合わせた品種選定と出荷時期の調整で実施
期 間：10月～12月
対 象：入西小学校・南小学校・坂戸小学校 他
品 目：ハクサイ・キャベツ・ダイコン 他

③ 地方自治体との連携

坂戸市教育委員会と随時連携を図りながらプロジェクトを進めている。H30年度も小規模ながら市の予算化が実現し、堆肥・石灰・肥料が購入され、市内各校菜園の維持管理に利用されている。また、各小中学校で利用可能な農機具等の整備についても検討をはたらき掛けている。

Hack My Tsukuba ～市民の市民による市民のための問題解決～

【活動地域：茨城県つくば市】

システム情報系 教授 川島 宏一

1 事業の概要

市民が、地域の抱える課題やより良い生活・社会に繋げるための方策を特定し、自らソリューションを考え、実現に取り組む運動（Civic Hack）をつくば市において展開する。具体的には、市と市民・市民団体、エンジニア、学生、企業等が協働する「場（イベント名：Hack My Tsukuba）」をつくば市とともに設定し、それぞれの問題意識の共有、データを用いた可視化、解決策の検討と具体化（プロトタイプ製作）などに取り組む。

自治体は公開されていない公共データ、市民や企業等はアイデアや技術などの資源を提供する。こうした地域のステークホルダーの埋もれている資源の発掘、組み合わせによって、地域の身近な課題について市民自らが考え解決して行ける社会作り貢献する。

2 事業成果の概要

2018年度は、つくば市が重要政策課題の1つとして掲げる「安心の子育て～こどもとママパパにやさしいつくば～ 市民・行政・専門家による子育て問題の解決策づくり」を全体テーマとして、以下、全四回のスケジュールで取り組んだ。

- ・第1回 2018年6月2日（土）：子育てを巡る課題とあるべき姿、解決策の検討
- ・第2回 2018年8月11日（土）：ビジネスモデル・キャンバスを用いた実現可能性の検討
- ・第3回 2018年11月10日（土）：特定された課題のデータやマッピングによる可視化
- ・第4回 2019年1月26日（土）：解決策となるアプリのプロトタイプ作成

講座を受講する学生が、メインファシリテーターのほか、広報、資料作成、調達の業務を分担し、Hack My Tsukuba の円滑な運営に携わった。

3 地方自治体との連携

共催者として、つくば市が連携。主に、政策イノベーション部情報政策課が、Hack My Tsukubaの運営とともに、課題の可視化やソリューションに必要な

とされる様々な公共データの公開を推進し、大学と共に市民による問題解決の後押しをした。また、今回のテーマ「子育て」に関連の深い市のこども部やこども未来室等が、課題の検討やデータ提供などに協力、職員のイベントへの参加などがあった。



Hack My Tsukuba グループディスカッションの様子

4 今後の展望と課題

全4回のイベントを通じて、年齢・性別・職業・立場などが多様な参加者間での議論や解決策の検討を行い、地域社会の一員としての課題の共有や、課題解決に自分事として取り組む意識の醸成などの成果が得られた。また、つくば市にとっても、市民の問題意識や望ましい解決策などについて、直接市民から聞ける貴重な場として機能する可能性が感じられた。最終的に、市民自身の手によって実際に動くアプリも作成され、今後のシビックテック・シビックハックに繋がる一歩となった。

課題としては、全体を通して同じメンバーが同じチームで議論を深め、解決策を具体的なアプリやサービスに昇華させていく形が望ましいと考えられた。このため、次回以降は、事前に全体のスケジュールと構成を固め、目的の設定とメンバー間での共有、目的に沿った集客や事務局体制の整備などを行う必要がある。

博学連携による地域文化財の再生と利活用—土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの実践—

【活動地域：茨城県土浦市】

人文社会系 准教授 滝沢 誠

1 事業の概要

地域の歴史や文化を語る上で欠かせない文化財の中には、市民による理解が不足し、地域の中で十分に活かされていないものが多い。本事業では、そうした問題意識のもと、土浦市教育委員会と連携しながら市内の重要遺跡を再調査し、そのあらたな価値を市民にわかりやすく伝えるための学習会などを実施した。

2 事業成果の概要

事業の目的に沿って、(1) 市指定史跡・后塚古墳(土浦市手野町)の発掘調査、(2) 小学生向け学習会、(3) 市民向け説明会、(4) 后塚古墳の模型作成と公民館での展示、(5) 市民向けパンフレットの作成を行った。

以上のうち、(2)については、発掘期間中の12月11日に地元の上大津西小学校6年生を対象として実施し【写真1】、(3)については、同期間中の12月15日に地元住民を対象として実施した。いずれも好評で、今後の調査と学習機会の充実に期待する声が多く寄せられた。(5)については、隣接する市内最大の前方後円墳・王塚古墳の測量調査(2015年)と今回の発掘調査の成果を解説したパンフレットとして500部作成し、土浦市の考古資料館と地元の上大津公民館、並びに本学人文社会系学術展示室に配布場所を設置した【写真2】。



写真1 発掘調査を見学する小学生と説明役の大学院生

3 地方自治体との連携

本事業は、土浦市教育委員会(考古資料館)との密接な連携のもとに実施した。また、現地作業や模型展示においては、上大津公民館の全面的な協力を得た。

4 今後の展望

后塚古墳と王塚古墳については、2018年度から4ヶ年計画で順次発掘調査を進めていく予定である。それらの機会をとらえ、小中学生を対象とした学習会や市民を対象とした説明会、公開講座等を企画し、さらに充実を図っていききたい。また、地域文化財の意義を伝えるための企画展示を、土浦市考古資料館や本学の展示施設で開催することを検討していきたい。

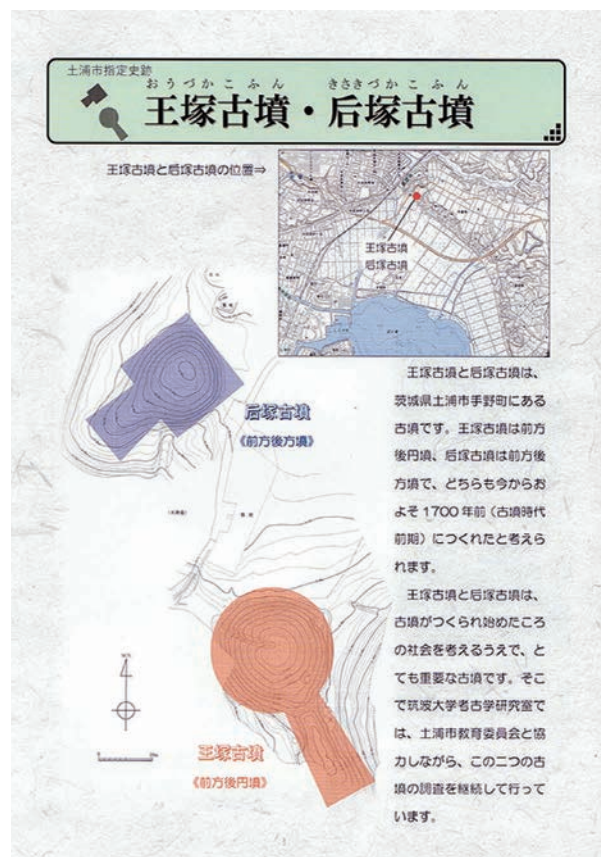


写真2 王塚古墳と后塚古墳のパンフレット(表紙)

盆 LIVE2018

【活動地域：茨城県つくば市】

人文・文化学群 比較文化学類 小田島実結

1 事業の概要

平成 30 年 9 月 22 日、研究学園駅前公園にて祭りを開催する。伝統的な盆踊りと J-POP や洋楽等、古今東西の音楽との融合、音楽・芸術等のライブパフォーマンスを行う。種々の出店・縁日なども用意し、老若男女が楽しめる祭りを目指す。

2 事業成果の概要

前日には小雨も降ったが、9 月 22 日に予定通り開催することが出来た。8 社からの企業協賛と 6 店舗の出店を頂き、来場者数は概算で 1200 名ほどを記録した。

浴衣を着て来てくれたお子様がいたり事前に駐車場についてのお問い合わせがあったりと、幼稚園や小学校へのチラシ配布や近隣のお店へのポスター掲示などの事前広報の結実を感じられた。また、4 回目ということもあってか学内での知名度も向上し、大学生の来場が大幅に増加した。

パフォーマンスは吉瀬三日月囃子保存会の方々、フリーでワンマンバンドの活動している方、筑波大学生によるお笑いステージ・弾き語りと、様々なバックグラウンドを持つ人々をつなぐという祭りの趣旨に合った方々にお願いすることができた。

メインである盆踊りは後半に進むほど盛り上がりを見せ、流行の「U.S.A. (DA PUMP)」などで大人から子供までが一緒に踊っている様子は壮観であった。盆踊りになんて触れたことがない子供たちに、人前で踊ることなんてフォークダンスが最後だった大人たち

に、たった一夜でも楽しんで踊ってもらえたならば、実行委員会として嬉しい限りである。

開催にあたってご協力いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



「夏祭り」に合わせて踊る様子

3 地方自治体との連携

つくば市とつくば市教育委員会から後援を頂いた。また、盆 LIVE実行委員会はつくば市の社会福祉協議会にボランティア団体登録を行っている。

4 今後の展望

今回は留学生への広報が不足してしまったため、その点を補ってより「つくばに住むすべての人の祭り」に近づけてゆきたい。盆踊りも楽しんでいただけたと自負しているが激しい運動がきつい方や乳児連れの方にも更に楽しんでいただける工夫の余地はある。

T-ACT 室と社会貢献プロジェクトの力を多大に借りてしまっているため、5 回目に向けては運営の自立をしていく必要がある。



祭りの全景

高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト 広報誌を介した地域づくり

【活動地域：茨城県つくば市】

人間系 教授 原田 悦子

1 事業の概要

みんなの使いやすさラボ（みんなラボ）は、2011年開設以降、「モノの使いやすさ」を研究対象とした社会貢献活動として、つくば市周辺地域在住の高齢者に「みんなラボ会員」としてボランティア登録をしていただき、モノに関する検証実験や研究参加、討論会などを定期的に行っている。これらの中で、みんなラボの活動を地域に広めたいという要望が会員から生まれ、本事業である「みんなラボ四季報」が発行されることとなった。



図2 完成した四季報第13号、第14号

2 事業成果の概要

四季報は、みんなラボ会員によって構成された「みんなラボ広報の会」（2019年3月時点で11名）のメンバーによって編纂されている。広報の会のメンバーは、みんなラボ事務局や筑波大学の学生と協力し、みんなラボの活動の取材・記事の執筆・推敲・校正・印刷などの編集活動を行ってきた。その結果、2014年の創刊号から2019年4月の最新号に至るまで、計14号にわたって、みんなラボの研究活動や会員による地域貢献活動などを発信している。

3 地方自治体との連携

みんなラボ四季報は、つくば市だけでなく、つくばみらい市・牛久市・土浦市・守谷市・取手市・龍ヶ崎市の市役所及び関係部署にて配布されており、また、つくば市・牛久市の社会福祉協議会やシルバー人材センター、生涯学習センターなどでも配布されている。みんなラボ活動の情報提供を通して、地域の高齢者の学習意欲の向上やコミュニティの活性化などに貢献することを目指している。



図1 みんなラボ広報の会の様子（共同研究棟A棟にて）

4 今後の展望

今後も、年に2回四季報を発行できるよう、広報の会を行う予定である。さらに、アンケートや読者の意見を踏まえて、さらに良い紙面づくりを行っていくよう、工夫を続けていきたいと考えている。

2018年度は、みんなラボ四季報第13号、14号を発行した。また、昨年度行った、四季報の感想や要望に関するアンケートの結果を反映する紙面づくりを行うよう、企画会議を重ねた。

柔道を通じた 世界の一流選手と日本の子どもたちとの国際交流

【活動地域：茨城県つくば市】

体育系 准教授 岡田 弘隆

① 事業の概要

筑波大学を訪れて柔道部の練習に参加している外国人柔道家を少年柔道の指導現場に招くことにより、外国人柔道家と日本の子供達との国際交流を図ることを主目的とした事業である。外国人柔道家には、少年柔道指導現場への参加により、子供達や指導者、保護者らとの交流を通じて日本の少年柔道指導の現状と、それぞれの国との環境や文化の違いなどについて理解を促し、日本の子供達には、様々な国で様々なスタイルの柔道が行われていることや、文化、習慣の違いを肌で感じることを促した。

② 事業成果の概要

インド、エジプト、ブラジル、カナダ、オランダ、ポーランド、オーストラリア、中国、ドイツ、アメリカ、ベルギー、チェコ、スロベニア、イギリス、クロアチア、ロシア、タジキスタン、カザフスタン、UAE、イタリア、フランス等から様々なレベルの柔道選手、柔道指導者、柔道愛好家が筑波大学を訪れた。

ただし、ほとんどが強化目的での訪問であり、その多くは短期間の滞在であったため、限られた滞在期間中に、しかもそれぞれの練習時間の合間を縫って少年柔道の練習に参加させることは困難であった。

この中で、戦略的・二国間スポーツ国際貢献事業（スポーツ・フォー・トゥモロー・プログラム）において、ブラジル人柔道指導者を日本に招聘し、本学を拠点として実技、講義、視察等を実施するというプログラムが開催され、プログラムには、「つくばユナイテッド柔道」の視察及び練習参加も含まれたため、参加者たちは、練習に参加していた子供達とともに汗を流し、練習後には、指導者、子供達と保護者、筑波大学柔道部員とのバーベキューにも参加し国際交流を図った。

また、個別で様々な国の柔道家が日本における少年柔道の現状に興味を持ち、「つくばユナイテッド柔道」の練習を見学、参加するなどした。あるいは、筑波大学で開催している「岡田弘隆杯争奪つくばユナイテッド少年柔道大会」や「筑波大学少年柔道錬成大会」を見学する外国人柔道家もいた。

さらに、外国人柔道家が参加している柔道部の練習を子供達が見学する機会もあった。

このような交流を通じて、日本の子供達は様々な国で様々なスタイルの柔道が行われていることや、文化、習慣の違いを肌で感じる事ができたのではないかなと思う。

多くの外国人柔道家が日本の少年柔道事情を理解し、それぞれの国における少年柔道指導に役立ててくれるのではないかと期待する。



ブラジル人柔道家と「つくばユナイテッド柔道」

③ 今後の展望

今後も、多くの外国人柔道家が筑波大学を訪れることは間違いないので、茨城県内の他団体はもとより、県外の道場、スポーツ少年団等にも外国人柔道家を連れて行き、多くの子供達に様々な国際交流の機会を提供したい。それにより、外国人柔道家もより一層日本の文化や習慣等様々なことを学び、経験する機会を得ることが可能になるだろう。

スポーツを通して東北を元気にする

【活動地域：福島県いわき市、岩手県大船渡市】

体育系（体育センター） 教授 山田 幸雄

① 事業の概要

東北地方において、バスケットボール、剣道の講習会を行う。中学生、高校生に対して、筑波大学で培われてきた科学的な練習法やメンタル、体力を含むトレーニング法を伝えるものである。同時に、中学生、高校生を指導する指導者に対しても、子供たちに対する指導法の講習を行うものである。これは、地域の市町村と連携して、地域の子供たちに元気を与え、地域社会の活性化を目指して行うものである。

② 事業成果の概要

平成 30 年 4 月 21、22 日、いわき市立御厩小学校、ならびに南相馬市立鹿島中学校（福島県）において「剣道教室」を開催した。平成 31 年 2 月 17、18 日、大船渡市立大船渡中学校（岩手県）において、「バスケットボール教室」を開催した。いずれも一時的かつ短期的な講習会ではあるが、本学の最先端の研究と実績に裏打ちされた練習法等を学ぶ機会であり、受講者の表情からは満足感と充実感をうかがうことができた。

（1）剣道教室

第 1 日目は、いわき市内にある 8 つの剣道道場から小中学生約 80 人が参加、2 日目は、南相馬市内の 18 の中学・高校から約 150 人の参加者があった。大学選手権優勝の指導実績をもつ鍋山隆弘体育系准教授ならびに剣道研究室の大学院生が実技指導を通じて剣道における各種技の修練法、トレーニング法を伝授した。



福島県での剣道教室

（2）バスケットボール教室

岩手県大船渡市内の 3 つの中学校ならびに大船渡高校より、現役のバスケットボール部員 83 人（男 48、女 35）と教員、外部コーチ、保護者が参加し、大学選手権優勝の経歴をもつ大高敏弘元体育系教授と女子バスケットボール部所属の学生が、大学での研究成果と指導実績を踏まえ、科学的な練習法、トレーニング法などの実技指導を行った。



岩手県でのバスケットボール教室

③ 地方自治体との連携

自治体のほか地域の NPO、道場、寺など被災地のコミュニティ復興に関係する団体との緊密な連携のもと、関係者や父兄等のサポートを得て順調に実施された。

④ 今後の展望

体育センターでは 2013 年より、社会貢献の一環としてこうした出張講習会を東日本震災の被災地を中心に試行的に実施してきた。継続実施の依頼があることから、数年前より体育センター運営予算を計上し、独自事業として継続に努めている。今後は、連携先の要望に応じ講習種目を拡大すると共に、健康や体力に関わる講義等の講習にも応じられるようにしたい。

⑤ その他

剣道教室の様子は、『剣道時代』2018 年 8 月号（体育とスポーツ出版社刊）にて紹介された。

地域コミュニティ形成の継続的支援

【活動地域：茨城県つくば市（福島県勿来町）】

Tsukuba for 311 代表 人文・文化学群 比較文化学類 小林 彩香

1 事業の概要

震災から8年が経過したが、東北地方では思うように進展しない地域もあり、未だ多くの方々が避難者としてつくば市に在住している。一方でその現状を知らず災害への意識が薄れている市民も少なくない。そこで、私達学生が、東北地方での活動や避難者との交流の中で得た知識や経験を市民に伝え、また避難者と市民を媒介することで、市民の深い理解を促す。

2 事業成果の概要

昨年度は、主にこれまでも行ってきたコミュニティ新聞「つくしま」の作成と、新たに企画した「みんなの防災展」という自主イベントの開催において、社会貢献プロジェクトを活用した。

【コミュニティ新聞「つくしま」】

本団体は、コミュニティのより強固な結束を図るため、避難者の方々とつくば市のつながりや、つくば市民の被災者への理解を深めることを目的に、「つくしま」というコミュニティ新聞を発行している。筑波大学内、つくば駅周辺、東北、外部の東日本大震災の復興支援団体など、様々な場所に「つくしま」を配布することで、人々の関心を向上させることが可能となる。結束したコミュニティの形成は、非常時において重要な意味を成す。人々のつながりを維持させ、関心を高めることを常に目標として、これからも「つくしま」の発行に力を入れていきたい。

【自主開催イベント「みんなの防災展」】

「みんなの防災展」は、これまでの活動を通じて得たものを基にして、防災への関心を広めるため、つくば市民や大学生を対象にして開催したイベントである。多様な非常食・防災グッズの試食やデモンストラーションなど、体験を通して防災について学ぶイベントとして今年の3月に行った。イベントには約60名が訪れ、市外からの参加者も訪れた。普段使用する機会が少ない非常食や防災グッズを用いてイベントを行うことで、人々の関心をひきつけ、災害・防災への注意喚起を行うことができた。



「みんなの防災展」にて展示したつくしまと防災グッズ

3 地方自治体との連携

通年お世話になっている福島県勿来まちづくりサポートセンターの方々と共に勿来地区のイベントのお手伝いをさせていただき、その活動内容をつくしまに記載した。

4 今後の展望

- ・年月の経過とともに市民の震災への意識は着実に薄れている。本活動を通し一人でも多くの人が震災について考え後に伝えていくことへの意欲向上を目指す。
- ・活動の中で、多くの方々との繋がりを堅固に、そしてさらなる発展を試み、より多くの人が本活動に関心を持ってくださることを目指す。
- ・被災者との交流を通して、今後予想される震災に対して自分たちの防災意識を高め、その知識や情報を発信することで多くの学生や市民が自らの防災準備に取り組んでくれること。

原発事故避難者に対する 自立型スポーツ・体操活動の継続支援

【活動地域：茨城県つくば市・北茨城市】

体育系 教授 長谷川聖修

1 事業の概要

東日本大震災からおよそ8年が経過したが、今なお福島県双葉町などの帰還困難区域からの住民を中心として500名を超える方が、つくば市に避難している。その避難者らがランドゴルフを企画・運営して定期的に実践し、互いに励まし合い、交流を深めてきた。しかし、参加メンバーの高齢化が進んでいるのが現状である。また、大震災や原発事故が発生した時期は、現在の大学生が小学生の頃であり、いわゆる「風化」が問題となっている。

そこで、このランドゴルフに本学教職員・学生にも参加を呼びかけ、その活動に寄り添いながら、避難者から震災体験や現在の実情を知ること、今後の復興支援のあり方を考える機会とした。

2 事業成果の概要

1) グランドゴルフへの参加・交流

毎週火曜日、午前中に定期的に開催されたランドゴルフの練習に、延べ25回学生・教員が参加した。

ランドゴルフは、老若男女が気軽に楽しむことができ、有意義な交流の機会を得た。活動を通して、様々な苦難に屈することなく、明るく前向きに生きる避難者の姿に触れることで、スポーツ文化の可能性やその魅力を実践的に学ぶ機会となった。

また、高齢の参加者からは、「若い学生と交流できることは、とても楽しい」との感想が聞かれた。



ランドゴルフ活動の様子（つくば市並木公園）



ランドゴルフ大会における表彰式の様子

2) 東日本大震災の体験と現状に関する傾聴

こうしたイベントの後に、昼食を共にして、東日本大震災での体験や現在の暮らしぶり、福島県の現状などについて、避難者から直接に話を聞く機会とした。

3) 北茨城市の高齢者対象の「健康体操教室」

復興支援の手があまり届いていない北茨城市の高齢者にも定期的な支援を行った。「健康体操教室」（北茨城市大津コミュニティーセンター）：月1回（土）10時～11時半、約40名が参加し、計10回開催した。



Gボールを用いた体操教室の様子（北茨城市）

3 地方自治体との連携

北茨城市での健康体操教室は、健康づくり支援課の協力により保健師が参加した。

4 今後の展望

避難された方々の暮らしに寄り添いながら、未来を担う学生達の学びの場としても活動を継続したい。

農業体験学習を通じた地元小学生の農業理解の推進

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系 助教 加藤 盛夫

1 事業の概要

筑波大学つくば機能植物イノベーション研究センター（以下、T-PIRC）農場では、2009年以来、地域貢献活動の一つとして、地元小学校の「つくばスタイル科」授業における学習課題「地元の農業を知ろう」に協力して、農業体験の場として水田の一部を提供して田植えおよび稲刈り体験学習を実施している。今年度は、5年生児童が T-PIRC 農場を訪れ、6月に手植えによる田植え、10月に手刈りによる収穫体験を行い、農業に関する理解を深めた。

2 事業成果の概要

2018年は、田植体験学習が6月5日（火）に T-PIRC 農場水田で行われた。農場水田を訪れた栗原小学校5年生児童44名は、T-PIRC 教員および技術職員から苗の植え方を教わり、水田用の足袋に履き替えて水田に入り、前もって設置された田植用の綱に沿って、もち品種マンゲツモチの苗を移植した。



水田に入り一斉に移植をする児童たち

稲刈り体験学習は10月16日（火）に実施された。5年生児童44名は、T-PIRC 教員から収穫用鎌の使い方、稲の束ね方について説明を受けた後、技術職員の指導の下、6月の田植体験学習で自分たちが植えたもち品種マンゲツモチを、鎌で1株ずつ刈取り、束ね、干すという一連の作業を体験した。

児童は水田における手植え移植、鎌による手刈り収穫を通じて、農業という生産活動への理解を深めることができた。児童は、本課題での体験をもとに、米

作りについて学習して、「つくばの農業」についてレポートをとりまとめて、地元の農業についての理解をさらに深めている。



水田で稲を刈り、束ね、干す作業をする児童たち

3 地方自治体との連携

本課題は地元小学校の「つくばスタイル科」授業における学習課題「地元の農業を知ろう」に協力して実施している。茨城県は農業産出額全国第二位の農業県であり、本学の周囲も農村地帯であるが、地元小学生でも農業に触れる機会は意外に少なく、本課題の体験学習に参加する児童数は年々増加している。

4 今後の展望

本課題では田植体験と収穫体験のみにとどまっているが、イネ生育期間中の水田の観察や収穫後の米の調理・試食も体験学習に加えれば、環境教育・食育教育の効果も高くなると考えている。

5 その他

本課題は、T-PIRC 農場で実施している附属病院との協力事業であるダイケアプログラムと連携して実施した。具体的には苗の育成や稲刈体験における指導補助を行った。

筑波大学 社会貢献プロジェクト 2018－19

発 行 月 令和元年 10 月
発 行 元 筑波大学総務部総務課
〒 305 - 8577
茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1
E-mail chiiki@un.tsukuba.ac.jp
URL : <https://scpj.tsukuba.ac.jp/>
印 刷 いばらき印刷株式会社



筑波大学
University of Tsukuba